

ザ・シンクロニシティ・キー

宇宙と人生を導く隠れた叡智

デイヴィッド・ウィルコック

〈創造デザイン学会訳〉

本書を

いま仮の人間の姿でこの言葉を読んでおられる、ただ一人の無限の創造者——
意識、エネルギー、物質、生物、空間、および偉大な時間サイクルの作者——に捧げる。

目次

序 6

第1部 生きた宇宙の中の魂の旅 9

- 第1章 探究 9
- 第2章 歴史のサイクルと「一者の法」 35
- 第3章 シンクロニシティとは何か? 67
- 第4章 ソシオパス（社会病質者）を理解する 94
- 第5章 地球の敵 137

第2部 魔法の世界に入る 177

- 第6章 カルマは現実である 177
- 第7章 再生（生まれ変わり） 205
- 第8章 死後世界のマッピング 237
- 第9章 英雄とその旅 287
- 第10章 ヒーロー的一幕と二幕 317
- 第11章 恐怖に立ち向かい探究を完成する 331

第3部 勝利と敗北のサイクル 359

- 第12章 ジャンヌ・ダルクの復活 359

- 第 13 章 ローマとアメリカの間の 2,160 年サイクル 381
第 14 章 ベトナム、ウォーターゲイト、鉄のカーテンの崩落 407
第 15 章 天が落ちてきたのではない、眼からうろこが落ちているのだ 423
第 16 章 ヴェールの両側から見た 9.11 479

第 4 部 外なる危機と内なる危機を解決する 509

- 第 17 章 時代の終わりにおけるサイクルと予言 509
第 18 章 9.11 と陰謀団の敗退——サイクル的見通し 531
第 19 章 歴史はデジャ・ビュー（既視感）の悪戯をする 545
第 20 章 フォメンコの歴史サイクルとダニエル書 563
第 21 章 サイクルの説明と 4 次濃度シフト 589

著者紹介 652

訳者による解説 653

英文注 658

序

シンクロニシティは幸運な偶然以上のものである

シンクロニシティは幸運な偶然以上のものである。それは宇宙の繋がりの一つの現れである。それは、すべてが一体化した、繋がった全体の一部だということを証明するものであり、生命を確認するものである。

私が初めてデイヴィド・ウィルコックのことを聞いたのは、2008 年、叔母のケイト・フオスターを通じてであった。彼女は霊的な探究者で、セス、エックハート・トール、エイブラハム=ヒックスといった偉大な思想家のことを私に教えてくれたが、あるとき彼女は、ぜひとも DivineCosmos.com を開いてみるべきだと言った。ケイトはこのウェブサイトを、非凡な精神をもつ人によるものだと説明した。彼女はそれまでも、私を素晴らしい霊的教師に出会わせてくれていたので、私は注目した。DivineCosmos.com に私が見出したのは、ほんの最近明らかにされた、隠された世界に私の眼を開かせるものだった。それは意識の世界である。しかしデイヴィドの仕事ユニークなものにしているのは、宇宙全体に意識が行きわたっているという核心的洞察である。宇宙は生きていて、我々は、それを一つに結び合わせる生きた織物の一部だと彼は信ずる。何という美しい考え方だろう。

そういう考え方をする人々が利用することのできる情報が、この世界には満ち溢れている。本を出版する者として私が求めるのは、その無限とも思える利用可能なデータをとらえて、意味を見出すことのできる人々である。そこで私たちは、新しい洞察を古い考えの中に取り入れることを読者にお勧めする。私の叔母は2013年初めに他界したが、彼女はこの新しい意識を涵養するように、そしてその考え方を出版物に取り入れるようにという遺訓を残していった。私が最初に出したデイヴィドの本『根源の場の研究』は、「ニューヨーク・タイムズ」の発表するベストセラーに入り、世界中で売れた。それは、この宇宙における人間の位置についての百科事典的な知識を示す驚くべき本である。それは直ちにこの分野の古典となり、私はこれは新しい運動の始まりだと感じた。

『シンクロシティ・キー』は、その運動の次の展開である。『根源の場の研究』と同じ集中的で大胆な洞察力を特徴とするが、しかしここでは、この隠れた科学が、いかにあなた個人に影響を与えるかが、特に強調されている。今あなたの手にしておられるこの本は、深いレベルであなたの人生を変える力をもっている。

デイヴィドは一種の神的な狂人——半ばシャーマン、半ばストーリー・テラー、半ば暗号解読者——である。ただ、人生の気の遠くなるような問題の解答を求める探究において、彼は錐きりのような眼を持っている。彼は、見たところ説明不能に思えることの説明を、追及し、見出し、またそのコツを知っている。彼はまた、無遠慮なほどにポジティブであり、楽観主義的である。彼の言葉と研究は、希望と愛のメッセージをもたらす。ケイトが私をデイヴィドのウェブサイトに通じたのは、決して偶然ではない。私たちが彼の本を扱い始めたのは、決して偶然ではない。今あなたがこの本を読もうとしているのは、決して偶然ではない。この世界のすべては繋がっている。

ブライアン・タート (Brian Tart)

ダットン出版社社長、『根源の場の研究』および『シンクロシティ・キー』編集者

著者紹介

デイヴィド・ウィルコック (David Wilcock, 1973-) は作家、職業的講演者、映画脚本家であり、古代文明、意識の科学、物質とエネルギーの新しいパラダイムを研究している。彼の開拓した考え方や専門的知識は、DivineCosmos.com による幅広い活動によって、何十万という人々に知られるようになった。最初の著書 *The Source Field Investigations* は「ニューヨーク・タイムズ」によるベストセラー書籍となった。主要なネットワークの多くのテレビ番組に出ており、これを書きながら、ヒストリーチャンネル (米テレビチャンネル、主に歴史、ドキュメンタリーを放送) の「古代エイリアン」8回分を担当し、またロシアでテレビのプライムタイムに放送された、金融暴政を調査研究する2つのドキュメンタリー番組に出演した。ジェームズ・V・ハート——カール・セーガンと映画『コンタ

クト』を書き、スティーヴン・スピルバーグやフランシス・コッポラなどの監督と共に仕事をしている優れた脚本家——が、ウィルコックと共に *Convergence* というタイトルの大作映画台本を書き、これは現在、大手プロダクション会社からかなりの注目を浴びている。ウィルコックはまた、Gaiam TV で、*Wisdom Teachings with David Wilcock* というタイトルの、週一回の彼自身の番組を担当している。最後に、彼は、9度のグラミー賞受賞者であるミュージシャン（かつプロデューサー、エンジニアでもある）ラリー・セイヤーと共に50曲の音楽作品を書き、それらを収録した *Wanderer Awakening* を発表、自らリード・ヴォーカルを担当している。現在カリフォルニアに居住する。

訳者による解説

本書 (*The Synchronicity Key: The Hidden Intelligence Guiding the Universe and You*, 2013) は、2年前の前著『根源の場の研究』(*The Source Field Investigations*, 2011 邦訳なし) から分量超過のため割愛された、著者にとって肝要の部分を中心として書かれている。しかしそのときには、彼の言うパズルの最後のピースがまだ発見されていなかった。それが発見されて、すべての点と点が繋がり、この本は一気に展開された。それはこの本の最終章に詳述されている太陽系の構造に関するものだが、その概要は、私たちの「創造デザイン学会」サイト www.dcsociety.org の翻訳記事「2012年12月21日——ロマンスと現実 (I、II)」(2013/1/23、2/4) にも、より詳しく出ているので参照されたい。これはウィルコックの DivineCosmos.com の記事だが、このサイトに掲載される記事だけでも莫大な量に上っている。

この本は、「宇宙とあなたを導く隠れた知性」という副題が示すように、生きた宇宙の構造、その中での人間の本来の位置、それを導く神秘的な知性という究極の“デザイン”の問題をあらゆる方向から解明しようとする、史上最大の知的挑戦といってよいものである。こんな本はこれまで誰も書かなかつたし、そもそも書ける状況になかつた。その条件が生まれたのは、急速に宇宙が騒がしくなってきたここ数年であろう。特に「一者の法」(*The Law of One*) という5冊本のチャネリング情報がなければ、この本は書かれていないはずである。それにしても、よくここまで書けたものだとな誰しも驚嘆するだろう。この驚嘆すべき離れ業の裏にあるのが、実は“シンクロニシティ”——神秘的導き——なのである。これをどう評価するかは別として、科学者も哲学者も宗教家もこれを無視して避けて通ることはできないだろう——この3つの分野が究極的に一つに融合するという観点も含めて。

この本は2013年8月20日に発売され、私は発売と同時に買って読み、翻訳を決意した。2014という年が、いくつかのこの本の論点から節目になりそうに思えたというのも、翻訳を急いだ一つの理由である。ウィルコックも多くの「マヤ暦」信者と同じように、2012年12月21日に、何か地球規模の異変が起こるのではないかと考えていた。しかし特に何も起こらなかった。これによって、この話が人騒がせなペテンであったとは彼は考えていない。

人間の進化＝覚醒の時期が現実には迫っていると彼は考える。そしてこれは今では、多くの人が共有する考えである。

著者の基本的な哲学は、この宇宙は無生物も天体も含め一つの生命だという考えである。この想定を立証する事実は無数にあるだけでなく、この前提に立つことによって人間は先が開けてくる。皮膚という境界によって分れているのが人間の絶対的なあり方だとするならば、我々はこれ以上どうすることもできないが、一つの生命体として繋がっているのが人類の本来の（より高い次元の）姿だとすれば、人間が互いに苦しめ傷つけ合うことはなくなるだろう。生命的繋がりや意識の繋がりでもある。集合意識としての人間の成長・目覚めというものがなければ、人類はまたしても同じカルマを繰り返す、争いや戦争を繰り返すだけだ、しかし今、もし人類がその長年の愚行を断ち切る勇気をもつならば、全くこれまでに経験したことのない「黄金時代」を迎えるチャンスがある、というのがウィルコックの論点の中心である。これが「アセンション」＝次元上昇と言われる、宇宙的必然現象であり、その前提となるカルマを脱する方法はただ一つ、「許し」だという。だからいわば、95パーセントの宇宙的必然に5パーセントの人間の自由意志が加わって、一つの宇宙的事業が完成することになる。それに関連するもう一つの重要なポイントは、集団的な心のエネルギーが現実世界を動かすという立証された事実である。

この哲学の上に、彼の厳密で途方もなく広範囲な、驚くべき実証的論証が展開する。まず歴史は直線的に動くのではなく、「歴史は繰り返す」つまり、サイクルをなして動いている。これは25,920年をマスター・サイクルとしていくつもあり、そのすべてのサイクルが、まさに今この時期に一斉に回帰し、元の場所へ戻ったという。しかしそれは厳密に元の場所ではなく、スパイラルをなしてワン・ランク上昇する。これが歴史的必然としての「次元上昇」である。これを我々の進化上の先輩であり指導者である高次元地球外人は「穫り入れ」(Harvest)と呼んでいる。サイクルの目的は、再生(生まれ変わり)を通じて人間に成長期間を与え、霊的に実らせるためである。

こうしたことをすべて荒唐無稽として退けるのが一般の風潮だとすれば、そのように仕向けている暗黒勢力があることに気付かねばならない。彼らは、影の支配者、権力エリート、陰謀団、イルミナティなどと呼ばれ、我々に気付かれぬように、金融、メディア、政治、科学、医療など、あらゆる側面において我々を支配している。読者の大多数がこの本で一番驚くのは、その真相暴露の部分かもしれない。ウィルコックは彼らの陰謀を、暗殺の危険にさらされながら大胆に暴き、しかも復讐してはならないと戒める。彼らは、2つの世界大戦を両側から財政援助し、9.11を計画実行し、第三次大戦をもくろんだ。ウィルコックは特に、9.11という異常な事件に至るまでの道筋を、歴史サイクルという冷静な観点から追跡している。これは彼ら自らの没落の穴を掘った、それこそ穴だらけの犯行だった。彼が憚ることなく「地球の敵」と呼ぶこの闇の集団は、しかし、我々の心の闇の反映だと言う。ここが単なる暴露本と一線を画するところである。

我々は目覚めざるを得ない歴史的転換期にいる。そこでは二重の目覚めが同時に起こら

なければならないようになっていく。一つは、我々を支配するために、我々に目覚めて欲しくないと思っている「陰謀団」の存在への目覚め、そしてもう一つは、我々自身の心の闇が、いかに我々の目覚め——「黄金時代」への道——を阻んでいるかへの目覚めである。そこには「許せない者を許す」ということも、科学の自縄自縛としての唯物論的前提に気付き、ということも含まれる。

この本の魅力の一つは、膨大な注のついた学術的論考でありながら、かなり自伝的な要素をもち、彼自身に起こったことを通じて宇宙を解明するということにある。私自身が最も感動する個所の一つは、3章「シンクロニシティとは何か？」の初めに近い部分、彼がひどい侮辱を受けたあと、天（神）に向かって「私は苦しんでいる他者のために働く決意をしました。今まであなたは私を助けてくれましたが、今からは私があなたを助けたいと思う」と言った途端に奇跡（すなわちシンクロニシティ）が起こった場面である。これは、創造者の立場に立って、この世界に能動的にかかわろうとする者にシンクロニシティが起こりやすいということを示すように思える。「天が感ずる」とか「天を動かす」といったことは、この本の提供する宇宙モデルからすれば、宇宙的共鳴現象として、それほど不可解なことではなくなってくる。

米アマゾンでのこの本への評価が、これを書いている時点（発売から4か月半）で245件あり、実質的に9割近くが5つ星というのは珍しいのではなかろうか？

固有名詞の読み方で迷ったところは、著者自身による本書の朗読CDに従っている。

2014年1月6日

渡辺久義